

目次

訃報

新川 亮

4

いのちはかるくておもい

新川 亮

5

命の祝福

新川 亮

7

最終章でつかまえて

田宮 ケンジロウ

8

……そして赦しを

田宮 ケンジロウ

11

言葉はあなたのそばに

田宮 ケンジロウ

14

カラオケ

大元 無為

17

どんどん

大元 無為

20

世界地図①「プ」の世界地図

鎌田 東二

22

世界地図②失職・失脚しても太ったやから

鎌田 東二

27

クマ報道③ 平安京瓦版第2号 みなおなじやぞ

鎌田 東二

29

編集後記

新川亮・田宮ケンジロウ・大元無為・鎌田東二

30

奥付

32

表紙石絵

小泉 友美

毎日、死に触れる。そういう、仕事だから。

他者の死は、情報の集積。

いくら足し合わせても、その人の存在はいつまでも遠い。

立派な人だったと、肩書や受賞歴を書き綴る。

この人のニュースバリユーってこれくらいだよ、と。

故人を知る人に話を聞く。配偶者や子供、友人知人に仕事仲間。

そうして輪郭を浮かび上がらせる。きつとこの人は、こういう人だったのだと。

一度会ったことがあれば、その時の印象を思い出す。

ちよつと意地悪な笑い方、語尾の伸ばし方、こちらの目をじっと覗き込む鋭い眼差し。

死を記録し、生を保存し、歴史の断片に刻みつける。

いくらかほつとするのは、誰だってみんな死ぬんだ、ということ。

生き、古い、病み、死ぬことに、ぼくらは変わらない。その無慈悲なほどの平等性を思う。

お疲れ様でした。

またいつか、どこかでお会いできましたら。

いのちはかるくておもい

新川 亮

いのちはかるくておもい

ぱつとうまれてすつときえる

いのちはかるくておもい

だれでもなくてきみでしかない

いのちはかるくておもい

つぎのしゅんかん なくなる

いのちはかるくておもい

だれかのなかに いきつづける

いのちはかるくておもい

じぶんでだって けてしてしまう

いのちはかるくておもい

えらんでないのに ここにある

いのちはかるくておもい

すうじでだって あらわせちゃう

いのちはかるくておもい

いてくれて ありがとうとてをにぎる

いのちはかるくておもい
いつかはなくなるとおもえるふしぎ
いのちはかるくておもい
たえきれないくるしみももつ
いのちはかるくておもい
つながりのなかしようじでる
いのちはかるくておもい
きおくをかさねて みらいをつくる
いのちはかるくておもい
めざめるたびに かんじるじゆうりよく
いのちはかるくておもい
ねむっているときの なつかしさ
いのちはかるくておもい
たいせつなひとの かわいいねがお
いのちはかるくておもい
なつのおわりの せみのなきがら
いのちはかるくておもい
あきのはじめの とんぼのたいぐん
いのちはかるくておもい

なんぜんねんの きのいぶき

いのちはかるくておもい

たいふうのあとの すぐしいよかぜ

いのちはかるくておもい

ぐつときばって でてくるうんち

いのちはかるくておもい

たいせきした くらいつち

いのちはかるくておもい

みちばたの たんぽぽのふわふわ

いのちはかるくておもい

ふつといきをはげば とんでくふわふわ

いのちはかるくておもい

ふわふわと どつしりと こことあそこと

命の祝福

新川 亮

秋の光は柔らかかくこの世の全てを祝福するよう降りそそぐ
新しい命の芽生えはそこら中に小さな希望を灯す

丁寧に見てみればほらあそこにもとほのかな気配を漂わす

橙色の淡い花弁 錆びかかったベンチの青色

白濁とした意識の奥底に確かに懐かしく 掴めそうな温もりに
憧憬に似た甘辛く 尊き記憶の底の方

わたしと 呟く

輪郭はなおおぼろげで

ヴァルネラブルなシャボン玉のよう

破れて 弾けて どこまでも

暖冬を告げるような 鋭利な 乾いた光線を浴びる

最終章でつかまえて

田宮ケンジロウ

「銀河鉄道の夜」は未完の寓話

眠れない夜はケンジと共に描いてみる

悲しみが 怒りとなり

怒りが 憎しみとなり

憎しみが 赦しとなった時

彷徨える魂は 漆黒の虚空に解き放たれる

走って 歩いて 立ち止まり

踏み出して 下がって つまづいて

泥水をすすって また 吐いて

まなじりを吊り上げ また 書いて

打刻せよ！ 言葉 ことば コトバ…

これでもか？ これでもさ！

あの日 あの夜 穢土の国

風花はしんしんと 潮騒は轟轟と

幾万の慟哭 つんざく虎落笛

誰もがコトバを見失った

言葉は誰にも聞こえない ただいるだけ

とても小さく とても遠く とても深く

凍えながら暗闇で 叫んでいた

あらゆる色を宿した無量光が降り注いだ

乾いた唇がかすかに動いた

〈沈黙がわたしだ！〉

語り尽くせぬ 虚しさと

忘れられない 辛さと

拭い去れない 淋しさと

あの娘も あいつも 俺だって

語り出す 緋色の涙をひと雫

ポトリ ポトリと ひと雫

〈生きる悲しみ〉の囚人を愛せよ

天国 煉獄 記憶の監獄

銀湾は輝き 言霊はこごり ケンジは帰った

苦悶や自己愛を弄ぶ時は過ぎ去り

最終列車の汽笛が笑いかけた

ドン・キホーテ気取りのケンジなら

〈本当の幸い〉を知らない

こんな俺でも 赦されるだろうか

閉ざされた輪廻の岸边に立ち尽くし

狂気と理性のあわいに身を委ね

誰かの嘆きに耳を澄まし

永遠のための最終章をつかまえに

……そして、赦しを
田宮ケンジロウ

老女は フリルが付いた手作りの服を着ていた

「Kを愛したことは一度もない」

Kの遺書には、家族と職場の上官への言葉しかない
言いたかったはずの、残したかったはずの、

「本当の言葉」はどこにあるのだろう

「そう言えば、あの日の未明、人が窓ガラスを叩くような音がしたんです」

半世紀が過ぎても、やさ男と結婚し、未亡人になっても、覚えていた

Kが命を絶った あの夜のことを

おそらくその風は たぶんいまも 女の窓を揺らしつづけている

2時間は超えただろうか 女は自分に言い聞かせるように言った
「まじめ過ぎたんですよ くそまじめなくらい」

驚きもせず 逃げもせず 突然現れた男の面会に なぜ応じたのか
背丈が似て 垢抜けず Kが死んだ8カ月後に生まれた男に

男はKの使者 女は男にKを見た
ずっとはらみ続けたエクスキューズ それを伝えるラストチャンス
自分が救済されるため 差しだされた手を つかもうとしていた

微かでも 心にうずきがあったのなら

指先に小さな でも深く、棘が刺さっていたのなら

そのことを Kに伝えることができるのなら

赦されるかもしれない …そう思ったのだろうか、罪などないはずなのに

女は帰り際 思い出したように自家製の甘い梅漬けを渡した

…ずっしりと、重かった なぜ どうして

享年27歳。まだ続くはずだった人生と引き替えに Kは女に刻まれた
そうでなければ救われない Kも 女も そして、たぶん、僕も

2021年夏、二度目の東京五輪が終わった
そして、僕は、生きている

言葉はあなたのそばに

田宮ケンジロウ

へそうだね 言葉はいつだって無力だったね

言葉は誰にも見えない(本当にいるの?)

言葉は明日のミルクを買えない(役立たず!)

言葉は寒さをしのげない(冷たい奴だね)

言葉は独裁者をやってくれない(臆病者め)

言葉は金木犀のような甘い香りがしない(味気ないな)

怖いほど蒼い九月の空に ズドドーン ズドドーン

きょうも きのないも あしたも 砲撃は

終わらなかった

底知れぬ深い宙へ

戦士のため息は吸い込まれていった

それでも それでも それでも 言葉はいるんだ

ほら 聞こえるだろ(どこ?)

家庭にも 学校にも 職場にも 被災地にも そして

戦場にも

言葉は

お母さんみたいな優しい匂いが するかもしれない

虚しさでふさいだ胸を 満たしてくれるかもしれない

嗚咽して震える恋人を 抱きしめてくれるかもしれない

悲嘆に暮れる友を 温めてくれるかもしれない

誰も信用できなくなった孤独な私を

……勇気づけるかもしれない

命をつなぐ 細くて弱い糸

暗闇を這いつくばる あの人を導く かすかな光

でもね 無限なんだ 大きさなんか測れないんだ

言葉は歩き出す あなたの鼓動に合わせて(ほら、聞こえるだろ)

リズムを奏で ステップを踏み 大地を力いっぱい蹴りだして(さあ、一緒に)

詩となり 音楽となり そして 人生となり

国境も 人種も 民族も 宗教も 貧富も 憎しみも越えて

われわれの 未来の子どもたちのもとへ

言葉は傘 言葉は杖 言葉はランタン

言葉は水 言葉は塩 言葉はパン

言葉は師 言葉は友 言葉は恋人

言葉は涙 言葉は怒り 言葉は喜び

だから、聞かせてほしい あなたの本当の声を

カラオケ

大元無爲

カラオケが好きだ

インタビューをしていると

同好の士は何となくわかる

「今度カラオケでも行きますか」

誘ってみると「ぜひ、行きましょう」

たとえば言語学者のMさん

当時、伝説となっていた

フランス語で吉幾三の「雪国」唄うこと

フランス語の語感がなぜか雪国を思わせる

凄い、感動した

哲学者のSさんは、やたらと逸りの歌を唄う

福山雅治の「桜坂」は絶品だった

ただ、どんどん持ち歌をリモコンに登録してしまふ

「先生、ぼくにも唄わせてください」

「中島みゆきに駄作なし」

「中森明菜に駄作なし」

そう連呼していたのは評論家のSさん

囲碁界のレジエンド

メロディにおかまいなく大声で歌詞を叫ぶ

その迫力に圧倒された

経済学の大御所

意外なことに内藤やす子のファンだとか

十八番は「弟よ」

いまやインタビュー内容の記憶は希薄になった

けれどカラオケのワンシーンは鮮明に覚えている

人はなぜ唄うのか

≡さんは語っている

そもそもへ人間は歌う動物であり

へ歌は詩(うた)であり呪(まじな)いであり祈りである」と

ふと思う

そういえば(神道ソングライター)とは
まだお手合わせしていない

どんどん

大元無為

どんどん減っている

新聞の部数

どんどん減っている

新聞を読む人

信頼度は高いというけれど

部数も読む人も減っている

読者のメインは中高年者

このままだと

新聞は消滅してしまうかも

かつて巨体を誇った

恐竜のように

どんどん増えている

SNSを利用する人

どんどん増えている

情報の真偽はともかく

発信する人、拡散する人、影響受ける人

選挙だって SNS に左右される

▶ を使えば偽の音声や画像だって朝飯前

増殖するウィルスのように

ネット空間にあふれる悪意や嘘

どんどん進むネット社会

デジタル化、ペーパーレス化は時代の流れ

新聞社も危機感をもっている

電子版の普及にとどめるけれど

伸びはいまひとつ

どんどん進むネット社会

ますます高まるメディア・リテラシー

情報リテラシーの必要性

どんどん減っていても新聞の役割は終わっていない

「プ」の世界地図

鎌田東二

ぼくは新聞を読むのが好きだ

朝食を終えてコーヒーを飲みながらゆつくりと新聞を開く

記事はいつも多様で絵巻物のよう

そんな絵巻物に

大統領という言葉がひんぱんに出てくる

それは「大統領」領なのか？ 大「統領」なのか？

前者であれば、大きな統一された領土、つまり大国土という意味？

後者であれば、大いなる首領という意味？

どっち？

「プー」チンさん
トラン「プ」さん

プラトンさんもプロメテウスさんもプトレマイオスさんもプラネタリウムさんもびっくり！

この「プ」音頻出には

プは、可愛い音だ

プーもまあまあ

プーはちよつといただけないかな？

おならブーブーとかブーイングとか

でも

「プー」チンにもトラン「プ」にも可愛げはあるかな？

世界地図は 分断と武断で緊張緊迫金継

こまつたなあゝ

困惑コンドルこんちきしよー

落胆はしませんが新聞を読む眼鏡を落つことした

世界地図2 失職・失脚しても太ったやから

鎌田東二

見境なく交通遮断したトマス・クイーン大統領は失脚した。

失脚しても失職も絶食もしない太ったやから。

そいつらを似て食うか、焼いて食うか。

食うてもうもないわ。

腹ふくれんわ。

それ以上に腹立つわ。

世界は相変わらず見通しの立たぬ五里霧中。

世界地図は破れてる。

ぼくは縫い合わせてもそれを見ながら歩きたいけど、

もう無理かもしれん。

無理やな。

しかたないわ。

どうにもならんわ。

コマントレプー！

新聞を蹴散らして傍若無人の戦車が通る。

クマ報道③ 平安狂瓦版第2号

みなおなじやぞ

鎌田東二

今年もまたもやクマ騒動のクマ報道

クマがスーパーに入って閉じこもった

「閉じこもった」って、

ニンゲンが閉じ込めたんや

あぶないから

ニンゲンのいのちをまもるため

でもね

「いのちをまもるため」
っていうなら

猫ちゃんも

ワンちゃんも

クマさんも

おんなじやんけ

ちがうけ？

ぼくはいつもおもう

ニンゲンだけがなぜトクベツなの？

おかしいよ

そんなこと

そんなかんがえ

ニンゲンはトクベツではない

ほかのいのちとかわからない

その価値もソンゲンも

みんな

うまれてきて
しんでゆくんや

いのちもあるものさだめ

なかよくしたいな

どのいのちとも

わけあいたいな

どのいのちとも

このよにいきてあることのありがたさを

みんなにありがとうとてをあわす

編集後記

新川亮（あらかわ・まこと） 某通信社記者。大学で文化人類学を学び、約半年間、アフリカ・マラウイで呪術医が人々の病いの経験を構築していく実践を研究。記者歴は約10年。鎌田先生と出会わなければ、この歳になって詩を書くこととは思わなかった。出会いは不思議だ。必然なのか、偶然なのか。気が付けば、違う景色がぱっと広がることもある。詩の良い悪いが分からない（ただ素人だからか）。新聞記事の良い悪いは結構分かる。そこには型や決まりがある。でも詩にはそれがない（と私は思う）。でもそれがいい。正解のない世界がそこに開けていることに気付かせてくれる。硬直した言葉を（つまり認識を）揉みほぐしてくれる。下手でもいい、これは私のための詩なのだから。（下手も私も、詩はそれを疑うだろう）

田宮ケンジロウ（たみや・けんじろう） 近作3編を寄稿した。モチーフをあえて明かせば、東日本大震災、1964年東京五輪、そして、ロシア・ウクライナ戦争。いずれも取材や体験を基にしている。

言葉の無力さを感じる時期が続いている。一方で、フェイクも多いがSNS（動画を中心に画像、テキストも）の力を痛感する出来事もあった。新聞記者という仕事をしている限り、言葉の力を信じたいし、そう思わなければやっていられない。そんな思いから、一つめと二つめの詩が生まれた。

自宅の近隣には陸上自衛隊の演習場があり、週末になると日米合同演習や自衛隊による砲弾の音が聞こえる。沖縄の負担軽減が言われてからはその頻度は増えている。抜けるような青空に、ズドンという遠雷のような地響き。机に向かいながら、ウクライナやロシアの若い兵士たちはどんな思いで銃を握っているの

だろう、と考える。彼らのためにも、ペン先を研ぎ澄まし、記事を、詩を、書き続けなければと思う。

2番目の詩は、マラソン銅メダリストで後に自死した、あのランナーの話。自死の引き金となったと流布された女性を取材した時の様子だ。記事にしにくい表情や雰囲気、本音も詩なら表現できるのではないか。活字に残しておきたいと思って詩にした。詩だからこそ伝わるものがあるはずと改めて感じる。さて、読者のみなさまはどう思われますか。

大元無爲(おおもとむい) 新聞社に籍を置いていた身としては、新聞の読者が減っているのは残念なことです。とはいえ、それは時代の流れでしょう。

一方で、ネット社会化が進むのも、時代の流れであり、そのおかげで、私たちは多くの利便性を手にしています。ただ、光あれば陰あり。ネット上の誹謗中傷や誤情報の発信、SNSを利用した犯罪など、問題も多々起きています。

衆院選や兵庫県知事選でも、SNSが大きな役割を果たしたといわれています。これまで選挙に関心がなかった人が投票所に足を運んだことはプラス面だとしても、誤情報の影響など課題も残しました。いずれにしても、選挙の形、政治の形、さらには社会の形も変わっていくでしょう。

こうした変化の時代にこそ、正確な情報が不可欠です。世論調査では、メディアの中で新聞の信頼性は高いという結果が出ています。

信頼にこたえるためにも、ネット社会で新聞が果たすべき使命はあるはずです。いま、社会に必要なことは何なのか、それを見極め、自己研鑽を続けていくことが新聞に求められていると思います。

鎌田東二(かまた・とうじ) 2024年11月20日に、「災害学・災害社会支援者研修センター」を立ち上げた。第一期研修を来年2月から4月までおこなう。そのとき、研修受講生といっしょに比叡山や東山山中に入る。クマくんは冬眠中かな？

このセンターの理事になってくれている医師の長谷川敏彦さんと対談集をこの12月に集英社から出した。タイトルは、『超少子・超高齢社会の日本が未来を開く——医療と宗教のパラダイムシフト』。ぜひ読んでいただきたい。それから、来春には、『日本人の死生観』と題する本を2冊本で出す予定。これも、買って読んでちょうだい！



出口王仁三郎作 楽焼茶碗

二〇二四年十二月八日
編集・発行 新聞詩倶楽部